

アメリカの内戦

奈良敏行

十二月二十二日(二〇二四)に、「読む会」講師の岩田直樹さんを引率者に映画『シビルウォー アメリカ最後の日』を見に行つた。一行六人で二台の車に分乗。行き先は兵庫県豊岡市の豊岡劇場というミニシアターだ。

アメリカ合衆国が瓦解するなど一見信じられないが、ローマ帝国でさえ瓦解したのだから不思議なことでもない。崩壊のイメージを持つことができるかもしれないと考え、このアメリカ分断の映画を見るためにはるばると県境を越えた。

分断のきっかけは大統領が三期目(憲法違反)までその座を明け渡さず、FBIを解散するなど暴挙に及び、19の州が分離独立。「西部勢力WF」(テキサス・カリフォルニア連合)が二つ星の星条旗を掲げてホワイトハウスへ向かい進軍する。

ベテラン戦場カメラマンのリー・スミス(キルステイ

ン・ダNST) 、その友人記者ジョエル(ヴァグネル・モウラ)。リーに憧れる駆け出しカメラマンのジェシー・カレン(ケイリー・スピーニー)、リーの師匠サミー(スティーヴン・ヘンダーソン)という四人の顔ぶれが体験する内戦のリアルな現場が描かれる。

見慣れているはずの星条旗の星が大きく二つだけなのが衝撃的だった。進軍していく若々しい「国家」をそこに印象深く感じた。

きっかけは些細な事だが、その小さな裂け目から暴力がいつきに露出する。「西部勢力」を中心とした反乱軍が結束するための共通の目標を設定するのに、ホワイトハウス突入、大統領殺害はわかりやすい。競争心を煽るものとしても有効性の高いものだ。そして目的は達せられ、戦場カメラマンの前で大統領を射殺する。記念写真も残ることとなる。

アレックス・ガーランド監督・脚本のこの映画は秀作で、アメリカの分断の姿が十分イメージできた。さてしかし、その後はどうなるのだろうかと考えさせられた。ホワイトハウス突入・大統領殺害はアメリカ建国理念の抹殺だ。独立宣言の冒頭には次のように述べられている。

《すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可

侵の権利を与えられている」

分断の根っこにはこのアメリカの夢がもう実感できなくなったという絶望感がある。この映画は『アメリカは内戦に向かうのか』という書物に着想を得ている。キーになる概念として「加速主義」という言葉が上げられている。

《加速主義とは、現代社会はもはや救いようがなく、終焉を早めなければならないという終末論的な信念、あるいは新秩序を実現するためにこそ、終焉を前倒しすべきとする考えを意味する。それは、国を反乱の巷とし、民族浄化へといざなうワードでもある。》

いまの時代「民主主義」を逆手に取るような行が増えている。理念は文字通りには機能しなくてアイロニーに成り果てている。理念をかぎして下層国民を縛り付けている階層格差の秘密にみんなが気づきはじめてきたのだ。民主国家はまだ存在するが理念は揺るぎ始めている。かといってまだ専制国家でもない。この中間状態を「アノクラシー」というそうだ。現在はこのアノクラシーに片足を踏み込み始めているのだ。あらゆる希望が失われたとき、ついには、この民主主義という理念こそが自分たちに不利益をもたらしているのだと信じ始める。

アメリカには『ターナー日記』という人種差別的な右翼の聖書（正典）がある。内容は「白人の覚醒」だ。分断の

行く末にはローマ帝国がキリスト教を必要としたように、いずれカルト的な書物が脚光を浴びるのかもしれない。

支配者は「暴力」が近づいていることを一般市民にちらつかせる。そして支配者の元に結束させる。人種差別的なターゲットを作りだし一般市民に反撃させる。しかし、ある日その「暴力」は一般市民の日常空間の中に突然立ち現れ、「恐怖」がまん延することとなる。それからどうなるのだろうか。内戦には外部がないので終焉がない。敗戦には外部があるので、外部が秩序を形成してくれる。アメリカに手出できる外部はないだろう。止めどのない内戦の果てに国民国家の夢は消え失せ、部族（州同盟）の乱立となっていくのだろうか。

2024.12.22.

（参考）

バーバラ・F・ウォルター 井坂康志訳

『アメリカは内戦に向かうのか』東洋経済新報社 2023